

市川の歴史〈i〉

市川は「文化不毛の地」か

『市川の史的特色の第一は〈文化不毛の地〉ということである。』

この文は、当地区内のある小学校創立90周年周年記念誌に掲載されている我が市川に関する結論である。不毛とは、「土地がやせていて穀物その他の作物ができないこと・努力しても成果の得られないこと」であるが、果して私たちの祖先は努力をせずに、また成果を上げることができなかったのだろうか。否。以下、私たち市川の祖先が如何に努力を積み重ね、成果を上げてきたか、その歴史の一端を記す。



〔I〕縄文時代から居住していた―「長七谷地貝塚」

桔梗野工業団地内に位置している「長七谷地貝塚」は、汽水域に棲む貝類の堆積が見られる貝塚で、縄文時代早期（約7千年前）のものである。魚や鳥獣の骨のほか、釣り針やモリ・縫い針・ヘアピン等に加工した骨角製品も出土し、当時の自然環境や生活の様子を知る上で全国的に貴重な貝塚であり、〈国史跡に指定〉されている。

〔II〕鎌倉時代から開墾があった―「五戸郷々検注注進状」

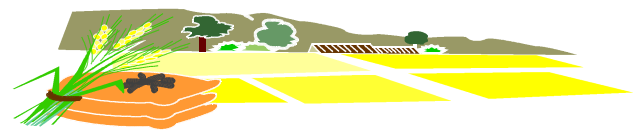
鎌倉時代の永仁5年(1297年)に書かれた「五戸郷々検注注進状」は、現在の岩手県北部から青森県東半分にあたる糠部(ヌカノブ)の五戸郷村成立を示す〈最古の資料〉として極めて貴重なものとされている。その後半には、「いち河一たん(反)」（北市川か）、とゝろき(轟木)八たん(反)七がう(合)」と記されており、この時代にはすでに市川地方の開拓・耕作が進み、検注(田畑の面積・耕作状況などの調査をすること)の上、それらの結果が時の〈鎌倉幕府に具申〉されていたことの証明になっている。

〔III〕江戸時代に書かれた凶作日記―「市川日記」のこと

天保の大飢饉(江戸時代)に遭遇した市川は向谷地在住の「佐々木太郎左衛門」が、「借考 往古近來 人姓至終時而 無不遭飢饉者…」という約六百文字の漢文で書かれた「序文」で始まる天保3年(1832年)から7年間の凶作の様子を「市川日記 天保三辰ヨリ七ケ年凶作日記」として書き残した。

この日記は、毎年の気象状況・収穫量・食料欠乏等々について市川地方の当時の凄惨な状況を克明に記し、今後の大飢饉に備える心得について子孫のために伝えたものである。天保9年の部には、馬鈴薯の栽培を試み、これが救荒(飢饉の際に救助)作物として有効であることを村人に勧めており、農業書としても注目されている。

後年、佐々木太郎左衛門の子孫である「向谷地又三郎・向谷地芳久」親子が、原文に解説を加えた図面・写真を含む360ページを超える典籍を発行し、その原典である「市川日記 天保三辰ヨリ七ケ年凶作日記」が「青森県重宝(重要な宝物)に指定」された。



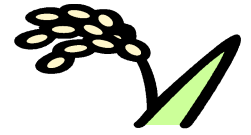
〔IV〕江戸時代後期の開拓者―「藤田又右衛門」のこと

市川町尻引の国道沿いに、大きな開墾記念碑が立てられている。その碑文には「市川前谷地一帯ノ地荒涼タル原野タリ 天保七年 南部藩士 藤田又右衛門 藩ニ請ヒテ初メテ開墾事業ヲ起ス」 父武兵衛ノ志ヲ継ギ「天候ノ障害ト戦ヒ…幾タビカ蹉跌…而シテ屈セズ 年ヲ閲スルコト二十一年 資ヲ投ズルコト巨萬 家産為ニ蕩尽…安政三年終ニ効ヲ奏ス 上水ノ延長…二里余…開墾地百六十町歩ニ及ブ 人之ヲ又右衛門堰ト称ス…茫々タル原野ハ美田ト変シ ソノ恵沢千歳ニ流ル 現今実ニ三百六十町歩ニ達セリ…以テコレヲ不朽ニ伝フ 大正五年 市川村神明川原普通水利組合建立」とある。

市川と文化〈ii〉

幕末の北奥羽で開拓に一生を捧げた藤田又右衛門は、天保7年(1836年)開拓に着工、安政3年(1857年)達成。新渡戸伝は安政2年(1856年)三本木原開墾に着工、安政6年(1859年)達成。蛇口伴蔵は安政6年(1859年)下洗や階上上水に着工したが途中で断念。換言すれば、藤田又右衛門は他の二人よりも早く開墾に着工し、しかも一番早く成就したのである。

かつて、小学校社会科副読本「私たちと八戸」に、「市川のかいこん 藤田またえもん」として3ページにわたり掲載されていたが、現在では取り上げられていない。また、八戸の新聞社が発行した「きたおうう人物伝」という書籍には、新渡戸伝や蛇口伴蔵に関する事業計画・業績等が掲載されているのに、藤田又右衛門に関しては名前すらない。理由は解らないが誠に残念である。



〔V〕明治初期のすぐれた学校―「下市川小學」と「轟木小學」

明治5年、日本で初めて近代学校制度が公布された3年後の明治8年10月29日に下市川小學(多賀小学校)が「願叶庵」に仮設。翌年の明治9年5月5日に、第7大学区第17中学区轟木小學が「清麓堂」に開校した。その2年後の明治11年には文部省の官吏が県下を視察し、当地区の轟木小學と下市川小學について次のように特記している。

「巡視セシ部内ニテ更ニ記スベキ小學ニアリ 一は三戸郡の轟木小學ニシテ 此村ハ至ッテノ貧村ナレドモ學齡ノ児童ハ一人モ残ラズ就学シ 校舎モ亦新築セリ 一ハ同郡ノ下市川小學ニシテ 此ノ小學ニハ啞児二人アリ 形体線度 或ハ読本中ノ文字等ヲ試ムルニ 一モ誤ルコトナシ 教員ノ尽力想フベシ

「八戸教育史(上)」には、引き続き『明治十一年の県下の就学率は全学齡児童に対して二十六パーセントに過ぎなかったが、轟木小では百パーセントであり、また下市川小で障害児にまできめ細やかに教育をしているのを見てかつて「当国ノ人民は概スルニ愚且猾」「牛馬と同シク棲息」し、「異邦特域ノ人ニ相近キ」といった中央の官吏も、わずか三年でこのように改善されたことに驚嘆したのであった』と記している。

また、下市川小學の林忠藏校長・轟木小學の藤澤茂助校長(両者ともに会津藩士)は、刀や大砲に代えて児童の教育に心血を注ぐと共に、校舎新築の際には地域の皆さんも資金のほとんどを寄附したり、校長が亡くなった時には墓碑を建てる等、学校に対して大変協力的であったことが記録に残っている。

以上、五つの事実はどこに出しても恥ずかしいものではなく、むしろ私たち市川の人間が胸を張って誇れるものである。そして、藤澤茂助のご子孫は隣町の旧百石町、現在の「おいらせ町」に、その他のご子孫も現在はすべて市川にお住まいで、当地区のために貢献しているのである。



さて、文化(カルチュア)の語源は「耕作する」である。意味は「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果・世の中が開けて生活が便利になること」である。このこと等から、我が市川は果たして「文化不毛の地」と断言できるのだろうか。私は「長七谷地貝塚」「五戸郷々検注進状」「市川日記 天保三辰ヨリ七ヶ年凶作日記」「藤田又右衛門の開墾」「下市川小學(多賀小)と轟木小學」は、「素晴らしい文化である」と確信している。

かつて轟木はその語呂からか「オドロキ」と言われ、またイジガ(市川)は罪人の流刑地だと言われたものである。それは、盛岡藩である我が市川に対して八戸藩が「市川払い」をしたということに起因するとも言われている。しかし、「所払い」はどこの藩でも行われていたことであり、市川だけに罪人が来た訳ではない。「文化不毛の地」という言葉には、このようなこと等による軽視はなかったのだろうか。何よりも、私たちがこれを40年間も放置し、結果的には容認してきたことが問題なのかも知れない。(昭和41年度に創立90周年記念誌発刊)

終わりに、現在の市川地区は八戸市の他地区と比較して、面積・製造関係事業所(工場)数・従業員数がそれぞれ第一位、生産額も第二位であり、市のために貢献すると共に、細川重計先生の指導で始められ、現在では全国的に有名になった「市川苺」の栽培や、自衛隊関係の方々が多く生活している等の特色を有している。

この度、多くの方々のご協力により「市川地域協働のまちづくり推進事業」の一環として「市川地域連合町内会」が結成されることになった。誠に喜ばしい限りである。これを契機に、今後の市川が「豊かな文化の地」と言われるようになることを私は願っている次第である。(一部の資料名を省略致しました。 木村隆一)